

あかし、うつくしき鳥なり、さるづりほそし、冬の内來る、年によりわたらぬ事もあり、
〔飼鳥必用下〕照うそ 香うそ 黒鸞 頬赤うそ 四色

此鳥黒うそは雌也、香うそ照うそは色に甲乙あり、時すれば色さめる也、此鳥日光ち、ぶより澤
山出る也、黒うそ照うそ是を庭籠に入、寛政申年、愛宕下邊にて子出來たる事あり、此外に大うそ
と云有、ま、江戸へ來る事あり、尤享和元年に、江戸所々にて取しと有、勿論大うそと黒頬赤てり
うそ、何れも照りは至て丹色也、外のてりとは違ふ色なり、大さかるほど有、

〔武江産物志〕山鳥類 うそ 四ッ谷邊

〔山家集下〕ことりどものうたよみける中に

も、ぞの、花にまがへるてりうそのむれ立をりは散心ちする

〔看聞日記〕永享七年六月廿五日、養小鳥ヒハツニ、入籠籠代之内に鈎、夜付寢時分、鳥共ふためく、南御
方指燭を指て一見、口繩籠内に入、ウソ一吞畢、又ウソ一、ヒハ一死、言語道斷、驚畏、雜男共參、口繩打
殺畢、ウソ一、ヒハ一希有に生、自餘三は死畢、不便云々、口繩所行可恐々々、

〔大館常興日記〕天文十一年五月廿日、小鳥一うそ 高信獻之、

〔倭訓栞中編二十二〕ぶんでう 文鳥と書り、狀うそに似て麗はし、よて名とす、近來外國より渡す
といふ、

文鳥

〔本朝食鑑六〕鸞略 ○中

附錄 ○中 文鳥 狀似鸞而背腹帶紅、兩頰純白、脚俱紅、聲短不圓滑、
近時自外國來、以形麗號文鳥、今畜籠而孕育、類多矣、

〔百千鳥上〕文鳥 餌がい キビ、モミ、
米、アロ、

大きさ毛色世にゑることし、奇麗なる鳥也、古鳥若鳥、えれかねる物なり、盛りつよき物故、見合て
おく時は風子を産て、親鳥のため散々あし、巢も能なす物也、えかもせ話なく、親鳥飼立る物に